ニジェール支所便り

2019年7-8月合併号

【編集長】小畑支所長　【編集担当】佐々木企画調査員
Tel:（227）2073 5569　Fax:（227）2073 2985　E-mail: ni_oso_rep@jica.go.jp

☆ニジェール支所便りが JICA ニジェール支所の HP でも閲覧できるようになりました！懐かしのバックナンバーにもここからアクセスできます!! ⇒ https://www.jica.go.jp/niger/office/others/newsletter/index.html

今月のトピック

- 支所長からのひとこと
- 短期出張者が見たニジェール　中村公隆専門員　～甘噛みパラダイス！　イン　THE　ギャラクシー～
- プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介
  ～みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2～
  ～PASVA：農業普及システム改善プロジェクト～
- ニジェールにおける活動紹介
  ～ニジェールでゴミを集める日本人　第 20 話　−顔でわらって心で泣いて。男はつらいよ、ニジェール農村。～
- 編集後記にかえて　～ニアメ空港、驚きのビフォー・アフター！～

支所長からのひとこと

5 月下旬に着任したころは水で朝シャンも大丈夫でしたが、さすがにそれでは冷たくて耐えられない季節になりました。ニアメの日中最高気温は東京を下回っており、夜も寝苦しくなくなり雨の降る日も増えてきています。道端で売っているのもマンゴーからリンゴに。

さて、7 月 4 日～8 日にかけて 30 か国以上の元首が参加しニアメで開催された AU 総会・サミットですが、12 億人を擁するアフリカ大陸自由貿易圏（ZLECAF）の開始（2020 年 7 月）に向けての重要な合意が示され、各国元首を迎え主導的な役割を果たせたことに、イスフ大統領もほっとしていることでしょう。街角には大統領が「みなさんありがとう」と言っている大きな看板が掲げられています。

この AU サミットに向け、ニアメの街角からは露店が撤去され頻繁に清掃活動が行われ、近代的な大型ホテルも次々建設され、老朽化していたニアメの国際空港は近代的な空港に生まれ変わりました。頑張って建設中だった新しい国際会議場はついに間に合いませんでしたが。。サミットが終わった後も、街の清掃活動は続くのだろうかと思っていましたが、これは続いているようで定着したのかな？

そのような中、JICA みんなの学校プロジェクト、農業普及システム改善プロジェクトの専門家の皆さんは、引き続き活発な活動を繰り広げています。

ニジェールもフェーズ 2 からメンバーに入った CARD の稲作倍増に向けた活動では、セネガル人専門家が支援に来訪し稲作分野のキイパーソンによるタスクフォースが 5 日間に渡り朝から夜まで活発な議論と作業を行い稲作開発戦略の改定素案が作られました。食料安全保障に向けた大統領イニシアティブが実務レベルにしっかり浸透していることを垣間見ました。

他方、治安面では 7 月中旬、ニアメ市内では珍しい発砲強盗事件が 2 日連続で起きました。いずれも銀行で現金引出し帰りの人がバイクに乗った 2 人組に撃たれ負傷したもので犯人は逮捕されましたが、その後もニアメ市入り口の検問でマリからのバス

に積まれた機関銃 10 数丁や拳銃が押収されナイジェリア人が逮捕される事件もありました。JICA 関係者は銃器犯罪への注意意識も高める必要がでてきました。

短期出張者が見たニジェール！

中村専門員ファンの皆さま、お待たせしました！6 月号で予告したとおり、前回こちらに出張されたときに頂いた原稿の 2 本目のお披露目です。さて、今回のお話の舞台となっている「ギャラクシー」、ニジェール関係者で知らない方はいらっしゃらないのではないでしょうか？そこで繰り広げられる、これまた懐かしい光景．．．皆さま、これより古き良きニジェールの思い出に思う存分浸ってくださいませ～！

甘噛みパラダイス！ イン THE ギャラクシー

いきなり訳わかんないタイトルで始まりましたがまたニジェールに来ちゃいました。現在乾期終わりでカラッとさわやか 45℃、血圧の高い身には非常に血行によい気候であります（なんせ準レギュラーですからあえて順応度をアピール）。前回の番外編は「昔々遠い遠い銀河で、」のスターウォーズ・シリーズ興行収入 VS ニジェールの GDP でニジェール辛勝というニジェール LOVER の皆さまには血圧をいやおうにも上げちゃうトピックでしたが、今回もギャラクシー（銀河）。とはいえフィクションではないニジェールのギャラクシーです。

LOVER の皆さんには語らずもがなですが、ギャラクシーとは二国出張者にとって定宿から歩って行ける憩いの超定番スポットです。以前このコーナーに書いたバッキバキマッチョでとほほな水泳ナショナルチームがいる国立オリンピックプールのすぐ裏にあります。ココのウリは何といっても開放的な夕空の下で雄大なニジェール川を眼下に冷えっ冷えのビールとアッツアツの串焼き（ブロシェット）でキメるサン・ダウナー。同じく、「夕暮れ」、「ニジェール川」、「ビール＆ブロシェット」をキーワードに出張者が「今日の自分にご褒美」的にまったりできるスポットとしては同じ川沿いの並びにある「グランドホテル（仏語っぽく言うと『グラントテル』？）」もあります。ここは好みが分かれるところなんですが、私はにじみ出るローカル感と、串焼きのチョイスの多さでギャラクシー押しです。なんせ正肉（ゼブ牛）以外に、タン、ハツ、レバー、マメ（腎臓）などのモツ系がビールと相まってオヤジの食欲＆尿酸値をアゲアゲにしてくれますから！それから女子にも大好評の「手絞りライム（シトロン）無料頼み放題」。これも魅力です。飲み物を頼むときに「ライムもね。沢山♡」とつとめてにこやかに（ここがポイントです）頼むと、半切りのライムがいっぱい、そしていかにもローカルメイドの真鍮製のライム搾り機（写真右下）がやって来ます。この搾り機がなかなかの優れモノでちっちゃなオタマが 2 つ重なったような形状なのですが、ライムがちょうどぴったり収まるくらいのくぼみに半身を落とし、上からもう一つのオタマをぎゅっと梃子の原理で押し込むと下のオタマの底に開いてる穴からジャーっと果汁が出る。そんだけの単純な仕掛けなんですが無駄なく搾りきれちゃうんですね。この生果汁が劇冷えの炭酸水やトニック、そしてビールにも実によく合うんです。ほらニジェールのビールってゴクゴク飲める軽いタイプなんでライム入るとラテン系のコロナやベルギー系の白ビールっぽい趣になるんですよ（あくまでも「っぽい」ね）。昼間の渇きが一気に潤される至福ののど越し、是非お試しあれ。ちなみにこの搾り機のローテクながらの機能性に感動してたら一度佐々木編集長がローカル市場で同じものを見つけてきてくださってお土産にもらったのですが、編集長、日本で売ってるライムやレモンじゃでかすぎてくぼみに納まりませんでした。笑

と、ニジェールの出張者定番スポットのご紹介はここまでにして今回のタイトルに絡む本題なのですが、ギャラクシー、犬が可愛いんです。ここからは犬好きのアナタに当て書き。犬なのですが客がいるテーブル群からちょっと距離を置いた砂地に常に 4～6 頭（今は 4 頭）ごくひっそりと佇んでいます。見た目はアフリカの犬にありがちな茶色短毛細身顔長のさっぱり系ではあるのですが、その態度と立ち振る舞いの「奥ゆかしさ」に正直ハ

マってしまいました。イスラム圏って概して犬がけっこう邪険にされてる気がするのですが、ここの犬たちの「生まれてすみません度」ったら、可哀そ愛らしさが全開です。昔タイの田舎町に出張してて路上の屋台の周りに遠巻きにのら犬たちがいたんですが、「かわいいなぁ」と思って食べてたおかずの肉の小片を脚元に投げたらビクッとさっきまでプルプル振ってた尻尾を急に股に挟んで「きゃいん、きゃいん、ごめんなさい、ごめんなさい」の状態であわてて 5 メートル程後ずさりして上目遣いにフルフル震えてる様子を思い出しました（犬好きの皆さん、「叱られたときの犬の目」というやつです。分かりますね）。多分屋台の人たちがきびしくあたってるんじゃないですかね。近づきたいのだけど怖い、でも近づきたい、でも怖い。そんなアンビバレントな犬の心情がここギャラクシーの犬たちにも感じられます。

見た感じ今いるここの 4 頭は 1 頭が母親であとは兄妹で生後 1 年にならないくらいの「体は大きいけどまだ子供」のステージなんですが 1 頭非常にアンビバレント度の高い子がいて、これがあどけなさプラスでたまらんのです。抜き足差し足で自分からアプローチして来るのに手を差し伸べると尻尾股に挟んで逃げちゃう、の繰り返し。この繰り返しを延々見続けるのもなかなかオツなのですが、できれば触れ合ってほっこりしたい。しまいに砂地に座り込んでしまいました（動物好き業界では「ムツゴロウ・アプローチ」というもの）。犬目線に合わせつつ驚かさないよう手を伸ばしたまま努めて静かに待ちます。犬は間合いをとりつつもらせん状に私の周りを回りつつだんだん距離を詰めます。そして伸ばした手にハナが触れるか触れないかのところまで来ました。

（以下、ナカムラ心の声）しかしここで私から距離を詰めてしまってはいけない。向こうから来るまで耐えろ、耐えるのだ、オレ。……

きたーぁ！指先ペロペロからのォ、、、、おおっ、早くも「甘噛み」きたかー！！この噛みの手加減具合にこの子の親愛の情が伝わるぞお（涙）！うおっ、甘噛みが、指から手、手から腕へ上がってきたーぁ！警戒レベルもうほぼゼロだ。ここまで来たらファイナルステージ！このまま腕噛ませた状態でやさしくひっくり返すぞ。（、、、コロッ。）　うおーっ、ついにお腹を見せたー！！これでもうぼくらはともだちだ

ー！！！おぉぉぉぉ！！！！　……（以上、心の声、終了）

「おー、よちよち、かわいいでちゅねー♡」

（坂上忍並みの幼児語飛び出すトランス状態で以降犬いじりたおし。こうなりゃ誰も近づけません）

いかがでしょう。この探り合い＆触れ合いのプロセスがたまらず（どんなに遊んでも翌日には関係がリセットされたところからスタートするので常に新鮮。でも記憶力ないのか、この子？）今日も通うぜギャラクシー！！たわむれた後になんとなく身体がムズムズする気もするが（なんかいる？）。犬好き出張者のアナタ、ハードだった一日のこころのリセットに是非！

ちなみに猫好きはグラントテルかホテルサヘルへ。

犬好きでない方への注釈「甘噛み」：いわゆる「ガブッ！」ではなく、「かぷ、」くらいの力具合の噛み。噛み手の噛まれ手への「親愛」、かつその情に流されない相手への「思いやり」もバランスよく伝えるには噛まれ手が「痛い」と感じる 1.5 歩手前で噛み手が噛みとどめる必要がある。（畑正憲　著　　扶桑社刊「愛され犬になる１０１の極意」より　　なワケない）

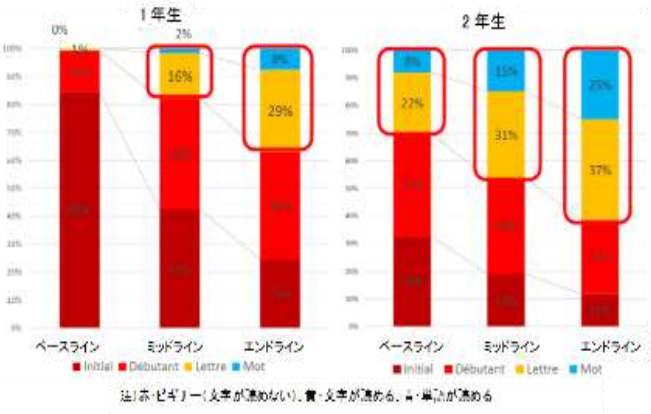
プロジェクト・専門家等の活動の進捗状況紹介

■■　みんなの学校：住民参加を通じた教育開発プロジェクト・フェーズ 2　■■■

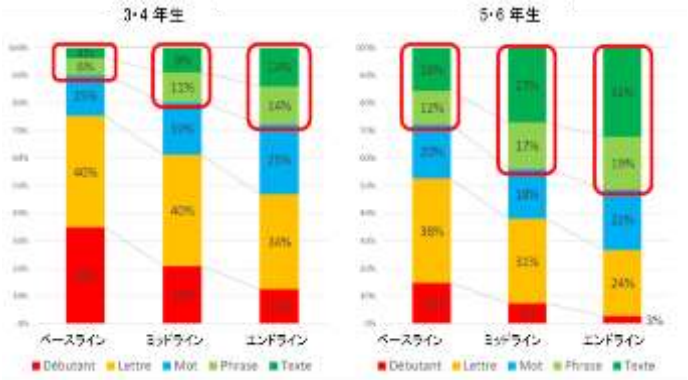
『みんなの学校：住民参加による教育開発プロジェクトフェーズ　2』では、初等教育分野と中等教育分野、二つの分野にて活動しています。初等教育分野においては、**住民支援の校外学習に効果的なツールを導入することですべての児童の“読み書き”と“計算”の基礎学力改善を目指す『質のミニマムパッケージ』の開発と普及**に取り組み、中等教育分野においては、**アクセス、格差解消、教育の質の改善など、様々な教育開発課題の改善に貢献する“機能する”学校運営委員会（COGES）モデルの全国普及**を進めています。

「初等教育分野」では、児童の能動的な習熟度別学習法（Teaching at the Right Level：TaRL）と算数ドリルを組み合わせた**「質のミニマムパッケージ」**読み書き・算数活動が、対象 101 校の 1 年生から 6 年生約 13000 名の児童を対象に今年度実施されました。2 月に開始したこの活動ですが、開始後 3 カ月半後となる学年度末の 6 月に、児童の学力状況の伸びを測るエンドライン学力テストを実施しました。この 3 カ月半もの間、各学校では週 10 時間の校外学習が住民支援で行われ、読み書き・算数それぞれ平均 70～80 時間の活動（計 140～160 時間）に結びつきました。その結果はというと、すべての学年で、読み書き・算数ともに大きな改善が見られるという非常に喜ばしいものでした。

読み書きにおいては、当初 1 年生の 1%しかアルファベット文字を読める子はいませんでしたが、3 か月半後にはその数はなんとほぼ 4 割にまで上昇しました。2 年生ではその数は 6 割を超え、そのうちの 25%が単語が読めるようになりました。また、当初、3～4 年生で簡単な文を読める子は 1 割、5～6 年生でも 3 割弱でしたが、今回その割合はそれぞれ約 3 割、5 割以上まで改善しました。そして文字すら読めなかった子の割合は大幅に減少しています。



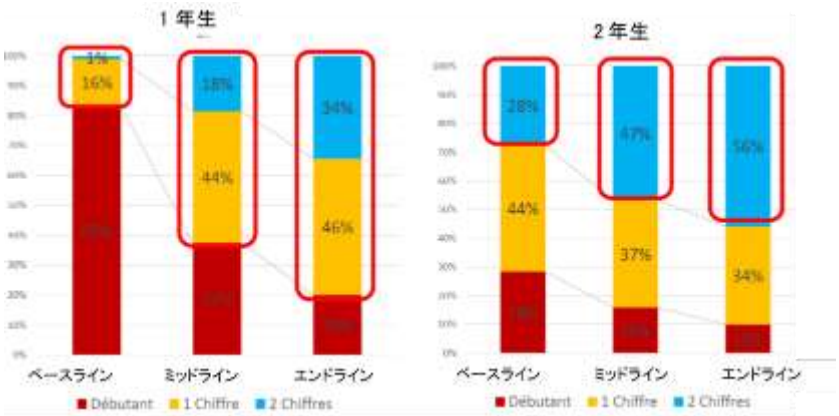
赤枠：文字・単語が読める児童の割合

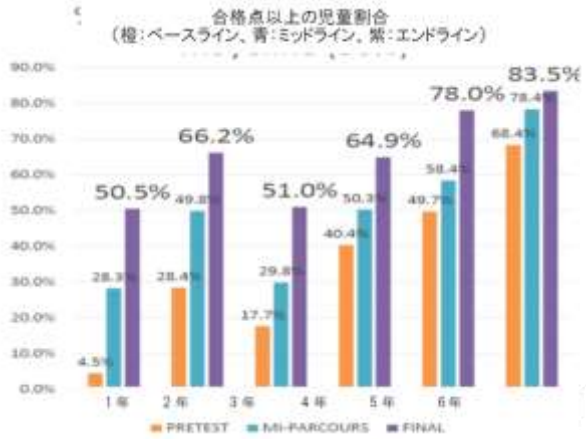


赤枠：文が読める児童の割合

算数においても、特に数が読めない児童が大半であった 1～2 年生も、1 桁、2 桁など、8 割・9 割方の児童が数字を認識できるようになりました。また、繰り上がりや繰り下がりなどの問題を含む四則計算問題で合格点に達する子どもの割合が、各学年平均 30%以上上昇するなど、計算力も向上しています。

赤枠：1 桁以上の数が読める児童の割合





緑：四則計算別「計算ができる 3～6 年児童の割合」

ある学校では、住民集会でエンドラインの学力テスト結果を発表したところ、その結果に歓喜した住民、保護者たちによって、集会が“お祭り”と化したそうです。教員、保護者、住民全体でつかんだ成果だからこそ、その喜びもひとしおだったのでしょう。

プロジェクトとしても、ポジティブな結果に胸をなでおろしてはいますが、容易くはない「質のミニマムパッケージ」活動に注力する住民たちの努力と期待に応えられるよう、今年度の結果を分析し、今後のモデルのさらなる改善へと進めていきます。

（EPT 専門家　影山晃子）

写真上：「質のミニマムパッケージ」算数 TaRL 活動の様子

■■　PASVA：農業普及システム改善プロジェクト　■■■

ニジェール支所便りをご覧になっておられる皆様、ご無沙汰しております。PASVA の園芸栽培/研修担当の小手川です。今回は私の方から、PASVA の活動状況をご報告させて頂きます。

PASVA では 6 月 14 日に第一回目のプロジェクト合同調整委員会（JCC）が開催されました。JCC には、ニジェール側から農業省事務次官の Diamotou Guessibo Boukari 氏を含む関係者 20 名と日本側から小畑支所長および小川総括を含む 3 名が参加しています。本会議では小川総括から PASVA の概要やワークプラン等の説明がなされ、これに対し参加者からの質疑応答が行われました。参加者からはプロジェクトが提案する「市場志向型の農業普及活動」の重要性を指摘するコメントや、それを推進していく上で必要な「農業省側の支援」および「関係機関との連携」を求めるものなど、プロジェクトの方向性に対してポジティブな意見が多く述べられ、PASVA に対するニジェール側の期待感がよく表れていたと思われます。PASVA としては今後 SHEP の効果を印象付けられるような成果を出していくことに注力すると共に、PASVA の活動に対するニジェール側のコミットメント（具体的にはプロジェクトに対する予算措置や PASVA 専従職員の配置等）をより多く引き出せるよう努力したいと考えています。

合同調整委員会の様子（2019 年 6 月 14 日）

さて、それで現在は何をしているかといいますと、8 月より本格的に開始される農家向け SHEP 研修に向け、鋭意準備作業を進めているところです。SHEP における重要な研修項目として、

「参加型ベースライン調査」というものがあります。これは研修に参加する各農家に「どの作目を」「いくらの価格で」「どのくらいの量を」販売して、「肥料等の生産コスト」を差し引くと最終的に「いくら儲けたか」を自身の手で計算してもらうものです。現地農家の多くはこうした計算を行っておらず、自身の生産した商品の価値自体もよく分かっていません。まずは自身の商品の販売単価や収益に対する理解を深めてもらい、より高い販売単価で、より高い収益を上げていくために何をすれば良いか、ということを考えていくための基準（ベースライン）を作るのが本研修のねらいとなります。

この研修を行うに当たって解決すべき課題が一つあります。それは、現地農家の多くは kg 単位での農作物取引を行っておらず、従って自身の収穫・販売量も kg 単位で認識していないことです。実際には、大抵、収穫直前にやってきた仲買人が収穫を待つ「農地の面積」と「農作物の状態」から農地にある収穫物全体に対して値付けしています。例えば「この農地に植えられているキャベツ全部を〇〇円で買います」といった感じですね。この情報だけでは、農家が実際に販売した量も販売単価も導くことができません。他方、こうした仲買人は作目別に慣習的に定められた特定の荷姿で取引を行っており、農家自身も自分が販売したキャベツの量が最終的に 100kg 容量の袋で何袋になったのかは大凡把握しています。つまり、キャベツならキャベツが満載された 100kg 容量の袋の「実際の kg 重量」が分かれば、少なくとも販売量については農家の実際の販売量を推定することができます。

前置きが非常に長くなりましたが、今現在取り組んでいる作業は「作目別の荷姿」と「各荷姿の実際の重量」に関する調査で、これを通じて作目別・荷姿別の kg 重量換算表を作成したいと思っています。調査に当たって、ニアメ市の現地普及員 5 名に協力をお願いしました。全員女性です。彼女達にどのようにして調査を進めるのが良いか尋ねたところ「あーだこーだ言わず市場関係者に話を聞くのが一番早い」とのことで、早速彼女達と一緒に市場に行き手分けして調査を行いました。市場ではヒアリング先の都合もお構いなし（のように見える）に情報をガシガシとってくる彼女達を頼もしく思うと同時に、彼女達を束ねていくのは大変だろうな…と思いました。この調査結果を基に kg 重量換算表を作成し、来たるべき SHEP 研修に望みたいと思っています。

事務所にて普及員と協議。「ともかく市場にいくべし！」という結論になった。

ローアングルから舐めるように被写体を写す。

普及員による撮影。メインの被写体はピーマンの荷姿と普及員自身で、秤が示す数値ではないのである。

ニジェールにおける活動紹介　～ニジェールでゴミを集める日本人　－顔でわらって心で泣いて。男はつらいよ、ニジェール農村。～

支所便り７月号（2016）から不定期でお届けしている、京都大学アフリカ地域研究資料センター・大山修一准教授の～ニジェールでゴミを集める日本人～シリーズ第２０話。今回は、ニジェールにおける世帯間での家計のやりくりについて執筆頂きました。

日本では、いまのご時世、男だの、女だのを論じる時代ではなくなっている。ただし、ニジェールでは、首都のニアメでも、地方の農村でも、男女それぞれの役割やそのちがいを意識させられる場面が多い。ニジェールの男性たちの多くは、「男たるもの、妻子を養い、父母の面倒を見て、余裕があれば兄弟や姉妹、そして異母兄弟のことも養わなければならない」という責任感が強い。家族が食料に困らないよう、男性は妻子のために一生懸命に働き、畑で農作業をしたり、商売で現金収入を得たりする。それが、世帯主（*mai-gida*）たる男性の姿なんだと、男性たちは強調する。日本では薄まりつつある責任感なのかもしれない。

わたしがニジェールで男性たちと会話をしていて、彼らが驚き、楽しむ話題がひとつある。それは、わたしが毎月、妻にお小遣いをもらっているということである。給与は毎月、銀行口座に振り込まれ、その管理をしているのは妻である。わたしは必要があるたびに、妻に手を差し出し、お小遣いをくださいと懇願する。こんな話をしながら、わたしがニジェール男性に手を差し出し、小遣いをねだろうとする姿に、彼らはころころと笑いこける。「どうして、世帯主が妻にお金をねだるんだ？」

わたしの居候先の世帯主、イブラヒム（仮名）は、国立気象局の技官であり、給与所得者である。月曜から金曜日まで毎日、ニアメの事務所に勤務する。地方への出張も多く、2 週間ちかく泊まりがけで出かけることも多い。出張費や手当てがつくので、悪くない仕事だ。イブラヒムには妻が 2 人いる。第一夫人は、ほぼ専業主婦であるが、小商いをしており、冷蔵庫のなかで氷や飲み物を冷やし、販売している。それほど稼ぎがよいとは思えない。第二夫人は中学校の教師で、月から金曜日まで働き、立派な給与所得者である。第一夫人と第二夫人は別に住んでいるが、ともに借家であり、世帯主であるイブラヒムの名義で借りている。イブラヒムは毎月、受け取る給与をどう配分するのか、自分の裁量で決める。

第二夫人はいう。「イブラヒムは 2 軒の借家を借りて、家賃を支払っている。最近、ニアメでは家賃が高騰しています。それに食費や電気代、水道代、ガス代、そして、子どもの教育費に医療費と、いろんな出費があります。しかもイブラヒムは長男だから、地方に残したお母さんの面倒も見なきゃいけない。毎月の送金も、経済的な負担だと思うわ。彼はいろんなビジネスに手を出すけど、失敗することが多い。わたしの子どもの学費や食費は、わたしがすべて工面しているのよ・・・。」こんな会話をしはじめると、第二夫人の不満は止まらない。

ニアメ市内の様子―車が通行するなか、モノ売りも多い。

ニアメの借家

―粘土でできた家も多いが、家賃は上がり続けている。

農村ではどうだろうか。男性たちはトウジンビエ畑を耕し、家畜を飼育するだけでなく、長い乾季には町へ出稼ぎに行く。雨季のあいだ、農作業のかたわら、商売をする男性も多い。出稼ぎは、チョコレートやタバコなどの小商い、パンやバナナ、オレンジ、焼き肉、医薬品などを売る商人、商店経営やその手伝い、バイク・タクシーの運転手、金掘りなど、いろんな仕事に従事する。

ニジェールの農村社会を一見すると、経済的に男性優位の社会のようにみえるが、実は、世帯主の男性の多くは家畜を持たず、女性が家畜を多く所有している。58 世帯の農村では半数の 29 世帯で男性が一頭も家畜を飼育しておらず、女性が家畜を飼育していなかったのは 13 世帯（22%）にすぎなかった。女性の多くが家畜を所有しているのは、子どもの養育と関係がある。子どもが産まれたのち、名前をつける命名儀礼がある。このとき、親族や近所から 500～2,500 フラン(100～500 円)ほどの祝い金をもらう。この祝い金で、家畜、とくにメスのヒツジを購入する。女性は子どもの将来を考え、教育費や医療費のほか、いざという時のために備える。かならず元手のメスを手元に残し、必要に応じて、子どもの家畜を売却し、現金を得る。だから、一度の出産に 2～3 頭の子どもを生むメス・ヒツジは大事に飼育される。

どうして、男性たちは家畜を持たないのか。それは、農村の食料不足と関係する。9 月中旬の収穫期をむかえるまで、ながい飢餓月を乗り切らねばならない。世帯主たる男性は食料不足に対応すべく、まず自らの家畜を売却するのである。男性たちは村の肉屋、あるいは定期市へ行ってヤギやヒツジ、ときにウシを売却し、その現金で食料を購入して、家族の食事に充てるのである。世帯主が自分のすべての家畜を売却して、それでも、なお食料が不足する場合には、妻に頼むことになる。第一夫人、第二夫人と 2 人の妻がいれば、不公平にならないよう、ふたり同時にお願いする。妻たちは世帯の家計・食料事情をよく理解しているから、ふつう、断ることはない。夫は妻の家畜を売却し、家族の食料を購入するのである。世帯主たる男性が妻に家畜の売却をお願いするのは、耐え難いもんだとしみじみ語る。

7 月から 8 月には食料不足が厳しくなるばかりか、農繁期となり、雨が降れば、気温も下がり、体力が落ちやすい季節である。ニジェールの友人たちは妻に家畜の売却までをお願いする不遇を憂いながらも、ときにパトロン(主人)として振る舞うわたしが日本では妻にお金を懇願しているという、そのギャップとともに、ニジェールと日本に似通った夫婦関係に笑うのである。

女性たちが大切に世話するヒツジ

市場で取引する家畜―家畜は「銀行(*asusu*)」といわれる。

今回頂いた原稿を読んで、私もかつてニジェールの農村で聞き取り調査をしていたことを思い出しました。聞き取りをした女性の多くは、大山先生が仰るとおりヒツジやヤギといった小家畜を所有し、乾季、世帯主たる男性が出稼ぎで不在の際、村のお年寄りや子どもたちを守るべく、家計のやり繰りをしています。定期的に夫が出稼ぎ先から仕送りをしてくれればそれに越したことないのですが、たいていはそれも当てにならないので、野菜を栽培したり、総菜を作って販売したり、いざというときは自ら所有する家畜を売って現金を確保していました。『支所便り』で紹介してきた野菜栽培の女性グループメンバーも、自ら育てた野菜を適宜販売することで現金収入を得、自らしっかりと資金管理していました。「世帯の大蔵大臣は母ちゃんが担う」という点も、日本とニジェールに共通する夫婦円満の秘訣なのかもしれません。（Y.S）

編集後記にかえて　～ニアメ空港、驚きのビフォー・アフター！～

私事で恐縮ですが 1 ヶ月ちょっと休暇でニジェールを留守にしたため、勝手ながら 7-8 月合併号とさせて頂きました。今回も、筆者の方々の豪華なラインナップのお陰もあり、読み応えのある内容となっておりますが、皆さまお楽しみ頂けましたでしょうか？

ところで、私自身、ニジェールとの関わりは 2003 年に遡りますが、その間今日に至るまでニジェールをこよなく愛する数多くのニジェール・ラバーの方々にお会いしてきました。その方々の多くが、久しぶりのニジェール再訪の際は決まって、「ニジェールは実に〇〇年振りだけど、ほとんど変わってないねぇ～」と、嬉しそうに感想を述べられます。その褒められているのか、はたまたけなされているのか分からない微妙なご意見に、私はいつも返す言葉が見つからず、ただただ曖昧な笑みを浮かべて頷くばかりでした。

しかーっし！今回ばかりは声を大にして言いたい！**「ニアメ、めちゃくちゃ変わりましたよ！」**

たった 1 ヶ月ちょっと留守にしただけなのに、ニアメの街、とりわけその玄関口である空港が大きく様変わりしました（これまでの私のニジェール滞在史上最も驚いたことかもしれません）。まず、飛行機の扉が開くといきなり容赦なく吹き付ける熱風に晒されることはなく、連絡通路を通って直で空港まで歩いていくことができます。その後、入国審査に至るまではエスカレターもあり、壁にはニジェールならではの写真が綺麗に飾られています。以前のように暑い中、長蛇の列で待たされることなく荷物受取りのターンテーブルまでスムーズにたどり着きました。残念ながらロストバゲージというというオチがついてきましたが、それでもこれほどまでに心躍る感動を与えてもらったので、さして腹も立ちませんでした。

この新空港の着工から完成までわずか 11 か月（！）というからさらに驚きです。その工事はトルコの業者によるものですが、そもそもなぜこれほどまでに急ピッチで仕事が進んだのか？それは、言わずもがな、7 月 7-8 日にニアメで開催された第 33 回 AU（African Union）首脳会議という一大イベントがあったからです。この会議にはなんと 4,000 人余りが招待され、（聞くところによると、実際の来訪者数は 7,000 人近くで、ニアメのホテルというホテルがいっぱいになったとか）ニアメの街中の道路は整備され、ホテルの建設ラッシュもいたるところで見受けられました（肝心の会議に間に合わなかった建設中のホテルもあります）。

さて、最後に下の写真（右）はこの空港の目玉ともいえる恐竜の復元骨格がスタイリッシュに飾られているメインホールです。この写真だけでは、なかなかこの劇的な変化が読者の皆さまに伝わらないかもしれませんが、それはこちらに来てからのお楽しみ、ということで！是非ご自身の目と、そして五感でこの感動を味わってください！

以前の空港（出発ロビー）にはスチール製の冷たいベンチがあるのみ。もちろん空調もありませんでした（汗）

それが、なんということでしょう！恐竜の復元骨格がなんとも印象的な美しい空港に蘇ったではありませんかぁ！！